

第3章 特別史跡多賀城跡附寺跡の概要

(1) 自然的環境

多賀城跡は宮城県のほぼ中央部の海岸寄り、仙台市中心部から北東に約10kmの位置にある。

多賀城跡が立地する低丘陵は松島丘陵と呼ばれ、奥羽山脈の東縁に始まる陸前丘陵が県中央部の海岸に向かって伸びる支丘陵の一つにあたる。仙台平野はおおむねこの丘陵を境に南北に分けられ、南には宮城野海岸平野が福島県浜通まで繋がり、北には広大な仙北平野が内陸に向けて広がっている。多賀城跡は二つの平野を結ぶ交通の要衝にあり、また南に広がる海岸平野を一望できる丘陵の先端に位置している。

松島丘陵は大小の沢によって複雑に開析され、多賀城跡周辺ではおおむね北東から南西方向に尾根が延びている。多賀城跡は低地に張り出す丘陵の先端部に立地し、標高は最高地で約50mである。南と西にひろがる低地は七北田川ななきたと砂押川すなおしの沖積作用によって形成されたもので、現・旧河道沿いには自然堤防が発達し、その背後には後背湿地が形成されている。また、海岸沿いには3列の浜堤が見られる。

多賀城跡が存在する丘陵のほとんどは新生代第三

紀の佐浦町層で構成されており、南門地区にのみより古い中生代三畳紀の利府層が露出している。後者には、多賀城碑に用いられたアルコース（花崗岩質）砂岩の残留巨石が包含されている。

現在のこの地域の植生は、暖帯性の植物と温帯性の植物が混在しその種類は豊富である。外郭北辺沿いなどの特別史跡内には、クリ・コナラ林を主とし、ケヤキ、ヤマザクラ、カスミザクラ、イヌシデ、カエデ類などからなる落葉広葉樹の二次林が広く残り、他の場所では落葉広葉樹林とアカマツ林、カシ類とツバキ等の照葉樹林、スギ・ヒノキ等の人工林が混在している。



多賀城跡周辺の地形



図6 多賀城跡周辺の地形（『第3次保存管理計画』より）

(2) 歴史的環境

多賀城跡の周辺では縄文時代前期から遺跡が確認できる。当時、多賀城跡西側の低地には海が入り込んでいたと考えられ、前期にはハマグリ主体の金堀貝塚が城内金堀地区に、中期には加瀬沼の北側の丘陵に加瀬貝塚が残されている。

弥生時代には低地の自然堤防上で居住が開始される。集落跡は未発見であるが、山王遺跡の微高地縁辺に中期の水田跡や遺物包含層が確認されている。

古墳時代では、低地にある新田遺跡、山王・市川橋遺跡にかけて集落が形成され、自然堤防縁辺には水田が営まれた。中期には豪族居館とも見られる集落が見られ、早くも鉄器生産が行われている。後期に形成される山王・市川橋遺跡の溝で囲まれた集落は大規模である。出土遺物には大和政権や関東、北方との交流を示すものも見られ、仙台平野を代表する拠点集落の一つであったと考えられる。周囲の丘陵部には稲荷殿古墳（多賀城市）・郷楽古墳（利府町）といった有力者の古墳とともに横穴墓群が発見されている。多賀城跡南門地区にも田屋場横穴墓がある。

多賀城は神亀元（724）年に創建され、陸奥国の国府として11世紀中頃まで存続した。平安時代になると、南面には東西・南北の大路を基準として徐々に基盤目状の道路が整備され、広大な都市が形成された。

古代末から中世初期には、陸奥国府を継承した「多賀国府」が存在したことが文献から知られる。その領域は多賀城を中心とする地域にあったと考えられるが、遺構としては確定していない。鎌倉時代、多賀城跡周辺には陸奥国留守職伊沢（留守）氏が実質的に領有する「高用名」（国府用の名ととれる）が存在していた。多賀城市新田遺跡や仙台市洞ノ口遺跡等では大溝で囲まれた屋敷跡が発見され、これらは留守氏一族の居館であり、また多賀国府の府庁も含まれている可能性が指摘されている。南北朝期以降になると、これらの屋敷は大規模化し、防御性の高い城館へと改修されている。

近世には多賀城市内に13の村があり、知行地を与えられた家臣は積極的に水田開発を行った。「正保郷帳」によれば市域の耕地面積の85%が水田であり、この姿が近代に受け継がれてきた。在郷屋

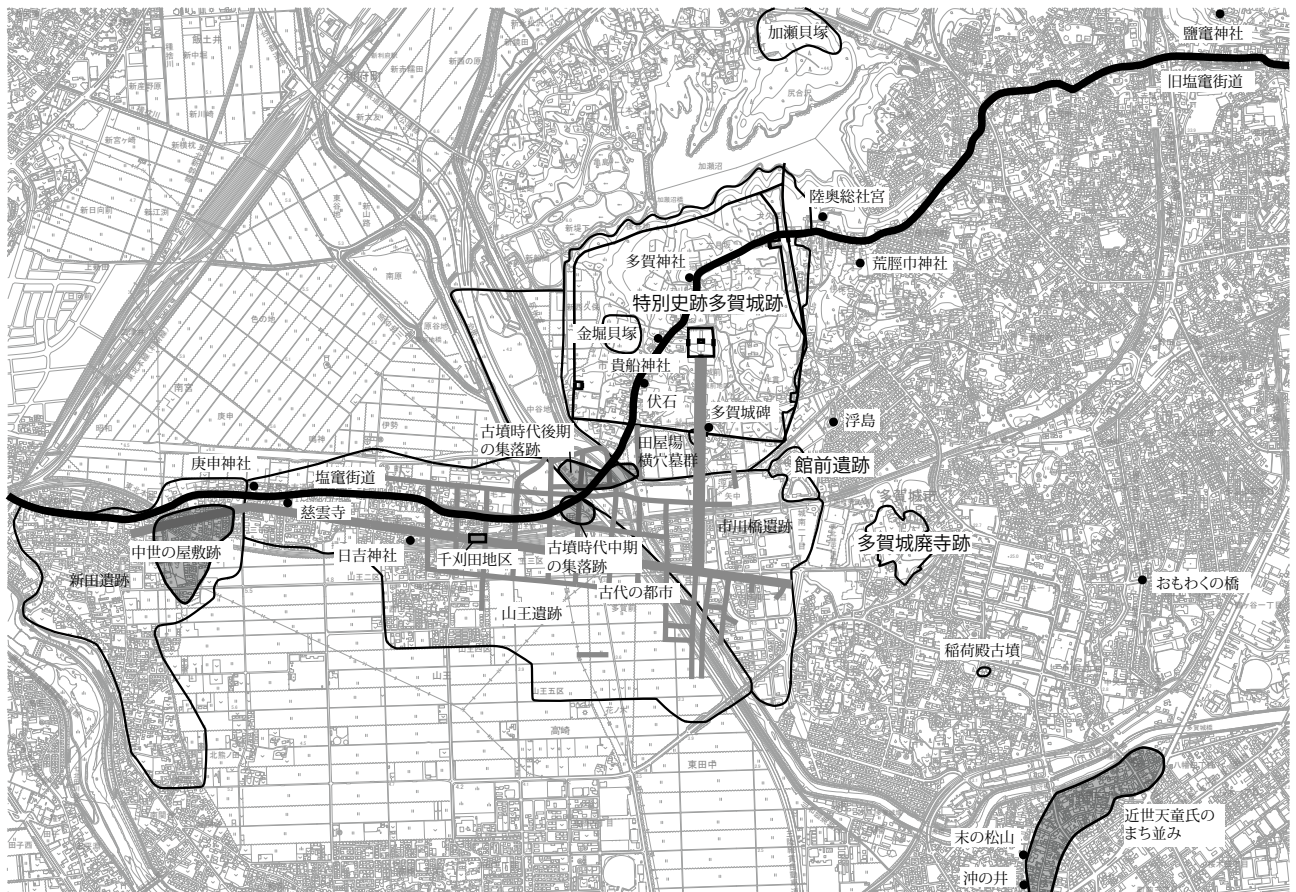


図7 多賀城跡周辺の歴史的環境

敷を構えた家臣のうち最大の家が仙台藩準一家天童氏で、多賀城市八幡に居住し、周囲に家臣を住まわせるまち並みを作った。このまち割りは江戸時代と大きく変わることなく現在に伝わっている。天童氏は加瀬沼を灌漑用のため池として整備したと伝えられている。

塩竈街道は仙台北城下から岩切・市川を経て鹽竈神社へと至る街道で、松島をめざす人々はそこから舟に乗った。街道はいわば観光の道でもあり、周辺には壺碑つぼのいしづみ（多賀城碑）・末の松山・沖の井おきのい（興井）等の名所・旧跡が良く知られ、多くの旅人が立ち寄った。松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅で壺碑を訪れた際もこの街道を通っている。南宮と市川の集落では、現在も江戸時代と変わらぬ位置に道が通っており、街道沿いの寺社や石碑とともに沿道の町並みに往事を偲ぶことができる。

(3) 社会的環境

① 周辺の状況

多賀城市内は北東部の丘陵地が市街地あるいは住宅地となり、海沿いの南東部には工業地帯が広がっている。多賀城跡は市域の中央部北端の丘陵上に位

置し、城内に残された豊富な緑地は、市内にあってほとんど唯一の貴重な存在となっている。

多賀城跡の西側と南西側には、南宮地区なんぐうの集落を挟んで農業振興地域とされる水田が広がっている。一方、東側の丘陵部では多少の緑地・農地を残して塩竈市の住宅地が密集して存在する。北側には、特別史跡内の緑地に続いて加瀬沼とリクリエーション施設として整備された都市公園加瀬沼公園がある。

特別史跡の南側には、多賀城市中央公園を挟んで城南地区住宅街が形成されている。中央公園ではサッカー場・野球場が供用されているが、あわせて古代の南北大路も表示され、周囲の大路広場とともに特別史跡への景観的な緩衝地の役割を果たしている。また、南側の住宅街では、南北大路の延長を示す道路を街路に取り込み、さらには南北大路にあっ



加瀬沼公園



多賀城跡周辺の航空写真



住宅街の中の
南北大路



住宅街
南北大路の
説明板

た橋の位置を色違いのタイルで示し、これらを紹介する説明板を設置する工夫をこらして、かつてここに古代都市が存在したことが理解できるよう配慮がなされている。

多賀城市は全域が仙塩広域都市計画区域に指定を受けており、特別史跡の中央部と西・南西方向の水田地帯は市街化調整区域とされている。特別史跡の北側部分と南側部分は、前述の都市計画公園に区域区分されている。南側に広がる城南地区は、第一種低層住居専用地域・第一種住居地域・第一種中高層住居専用地域に指定されているが、さらに、建物の用途・高さ・屋根及び外壁の色調・敷地境界線からの壁面後退等を制限する地区計画が設定されている。特に、南北大路の延長上の「政庁大路地区」では、建物の形態と色調に景観への配慮が強く求められている。

周辺の交通網として主要な路線は県道泉塩釜線で

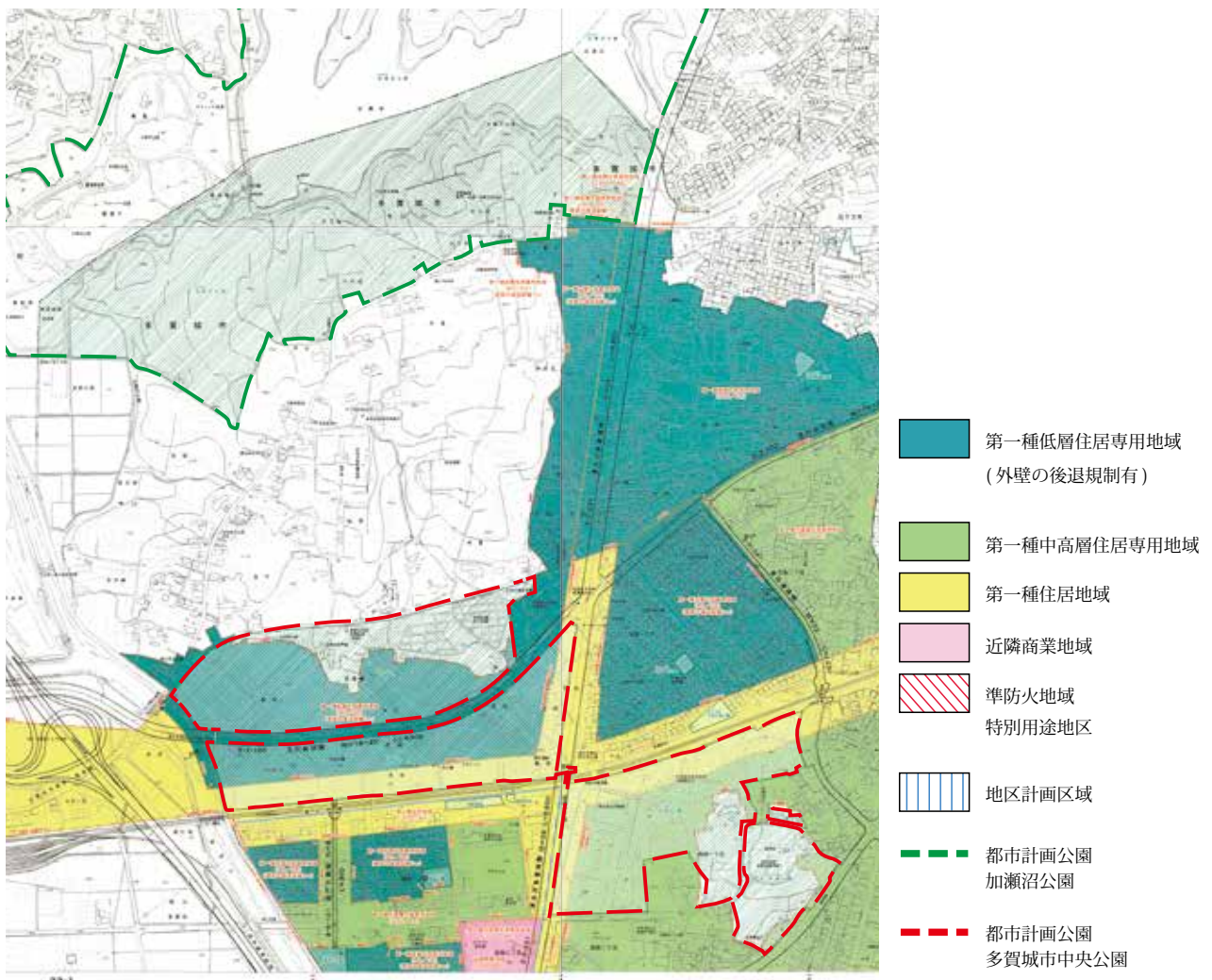


図8 仙塩広域都市計画図

(この地図作成にあたっては、多賀城市長の承認を得て、同市発行の地形図を使用したものです。承認番号 平成 26 年 11 月 20 日都計第 1272 号)

ある。これは平成21年に開通した仙台市東部と塩竈市をつなぐ都市間道路で、指定地の南縁を東西に走っている。また、この旧道にあたる市道新田浮島線は生活道路として利用され、南門地区の北を通っている。多賀城跡の西側には三陸自動車道が南北に走っており、平成28年度に多賀城インターチェンジ（仮称）が供用される予定であるため、今後一層の交通量の増加が予測される。多賀城市の中心地から城南地区の住宅地を抜け、南から多賀城跡に至る道路は市道水入線である。県道泉塩釜線と交差の後、城内で新田浮島線に突き当たっている。城南地区へは、国道45号線から直接繋がる清水沢多賀城線が近い将来開通する予定である。北からは、多賀城跡の西辺に沿って市道名古曾線が新田浮島線に至っている。城内には市道市川線が南西から北東に延び、塩竈市に至る。



国府多賀城駅



陸前山王駅



図9 多賀城跡周辺の交通網

中央公園の南縁には JR 東北本線が走り、東に国府多賀城駅が、西に陸前山王駅が設置されている。国府多賀城駅は平成 13 年に開設された新駅で、多賀城跡への最寄りの駅となっている。

近隣には、東北歴史博物館、多賀城市埋蔵文化財調査センターと史遊館がある。東北歴史博物館は、平成 11 年に旧東北歴史資料館を継承して開館したもので、多賀城跡を中心テーマの一つとし、代表的な出土遺物、模型、映像を用いて展示を行っている。国府多賀城駅に接し多賀城跡へも近いため、多賀城跡への誘導拠点と位置づけられる。多賀城市埋蔵文化財調査センターは、多賀城跡から南東へ約 1.7km、徒歩でおよそ 25 分の距離にある。平安時代、多賀城跡の南に形成された古代都市を中心とした展示を行っている。史遊館では、縄文時代からの多賀



東北歴史博物館



多賀城市埋蔵文化財調査センター
(市教委提供)

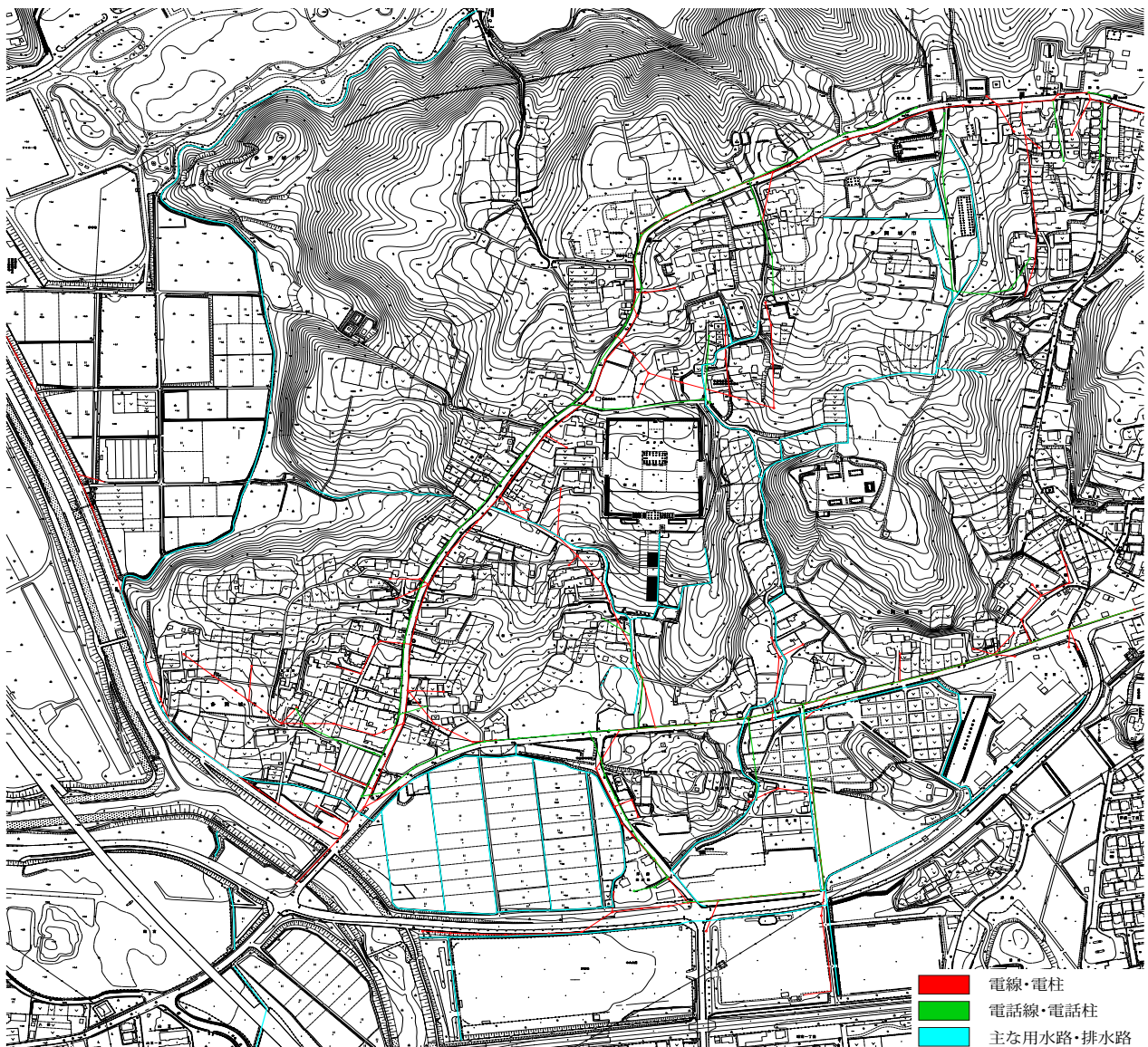


図 10 特別史跡内の公共物敷設状況 (市教委提供)

城市の歴史を紹介するとともに、常時さまざまな体験メニューを提供している。

② 土地利用状況

指定地の北側には灌漑用溜池である加瀬沼があり、指定地内ほかの水田へ水を供給するため、用水路が整備されている。

平成4年度に生活排水処理計画が策定され、公共下水道が未設置で、市街化調整区域である指定地内

には合併浄化槽の設置を推進することとなった。平成14年度になると、指定地内においても公共下水道（污水）を設置する事業計画が認可され、平成16年度からは下水道整備工事が始められている。

民有地の土地利用を地目別にみると、畑が最も多く13.6ha（28%）、次いで田12.8ha（26%）、宅地9.6ha（20%）、山林8.9ha（18%）となっている。

市道新田浮島線以南の指定地は都市公園である中

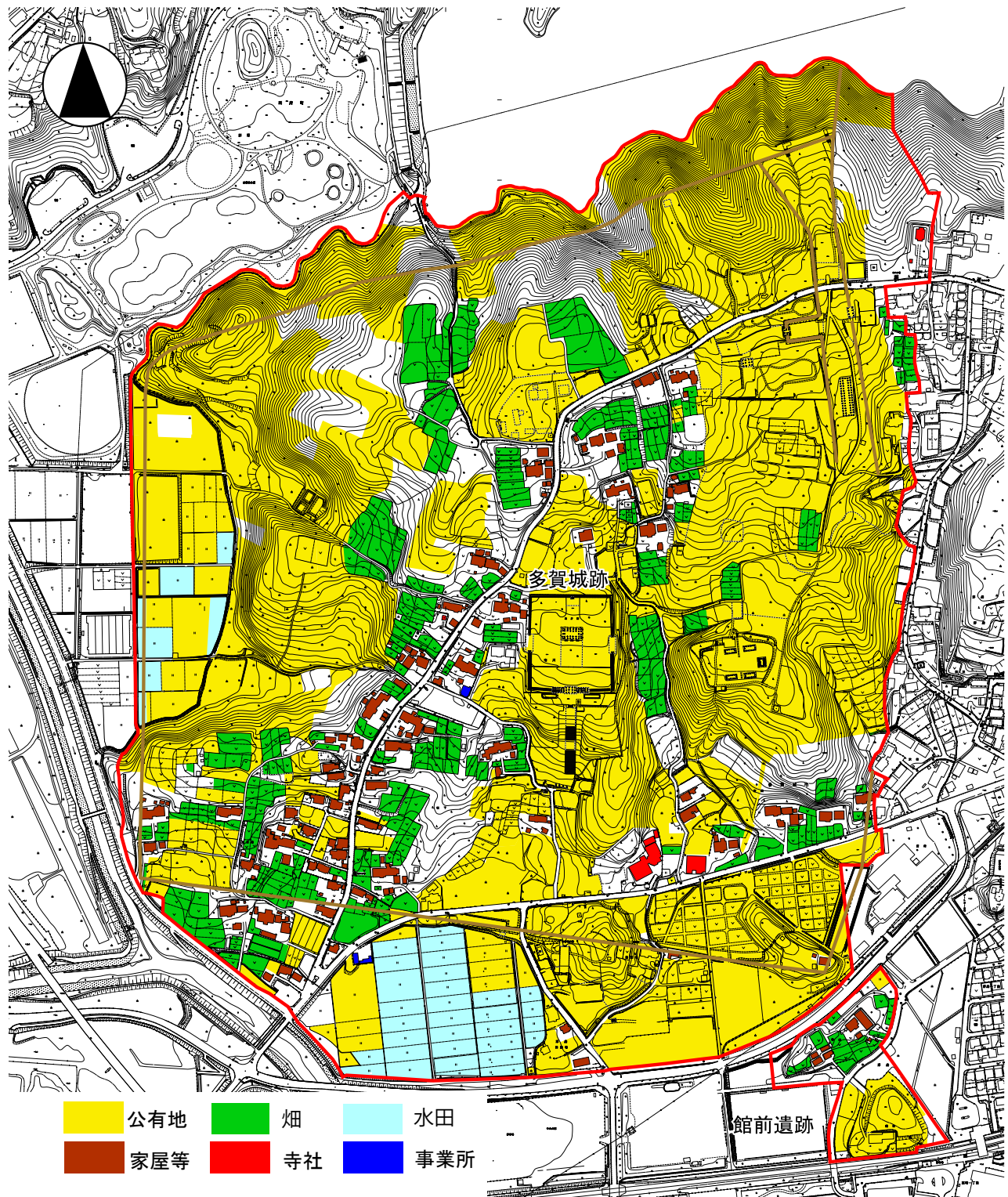


図11 公有化実績と土地利用状況（市教委提供）

央公園の計画区域となっており、現在、約 200,000 m²が事業認可を受け、多賀城跡あやめ園として供用されている。

③ 公有化事業の進捗状況

公有化事業は管理団体である多賀城市が昭和 38 年度から実施しており、平成 26 年 3 月末で、指定地の 55.39%が公有化されている。特に S 重点遺構保存活用地区（後述）では、第 2 次保存管理計画において計画的優先的に公有化するという方針が示されたことにより、進捗率は特に高くなっている。

(4) 多賀城跡附寺跡の概要－調査事業の成果－

多賀城跡附寺跡の発掘調査は、昭和 35 年に伊東信雄博士を団長とする「史跡多賀城跡調査委員会」によって開始された。昭和 36・37 年には多賀城廃寺跡が、昭和 38 年から 40 年にかけては政庁跡の調査が行われた。委員会は宮城県教育委員会が主体となり、多賀城町と河北文化事業団の協力の下で構成されていた。昭和 41 年度からは、多賀城町が「特

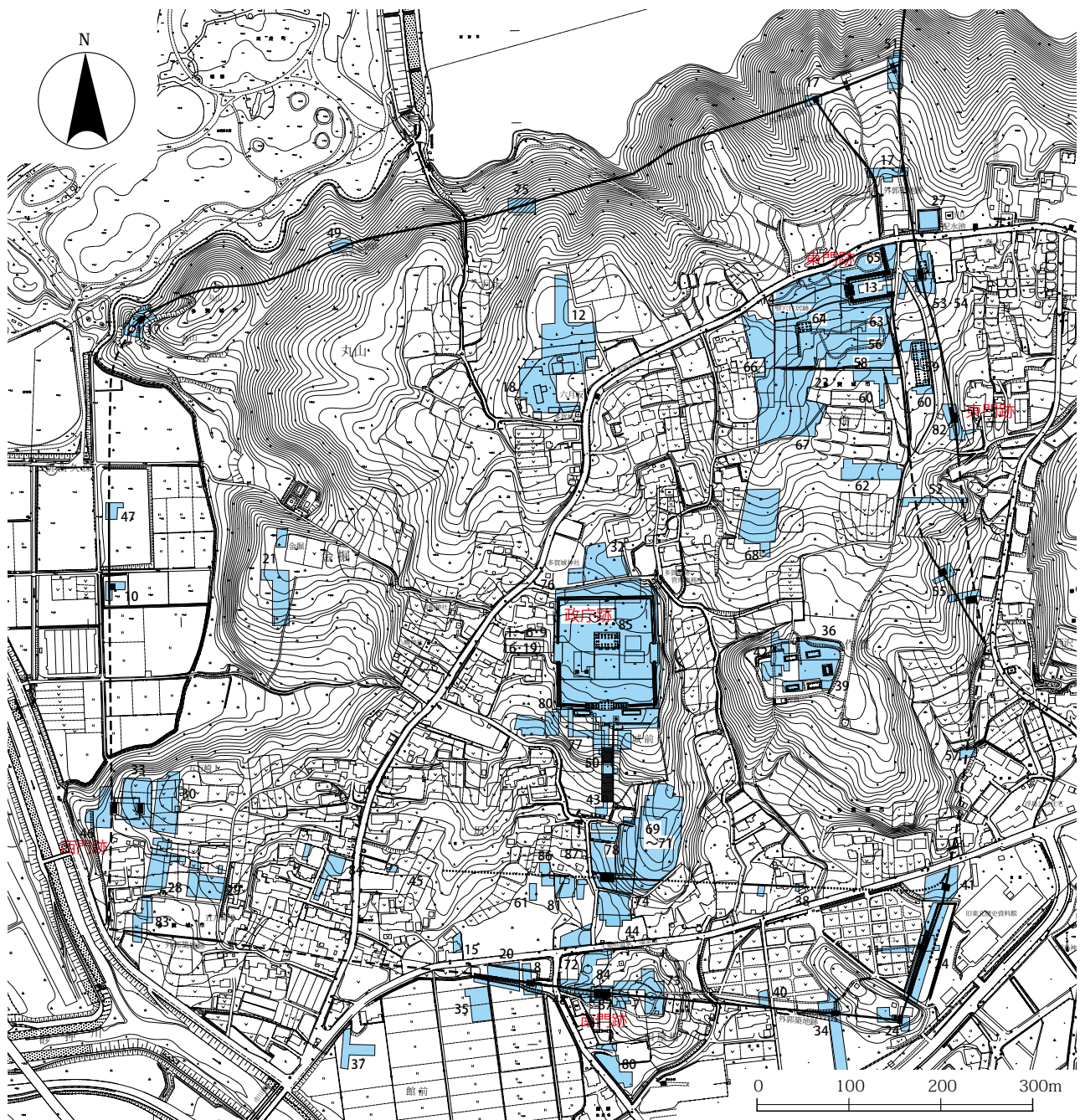


図 12 発掘調査実績（多賀城跡調査研究所）

①史跡多賀城跡調査委員会による発掘調査

年度	回数	発掘調査地区
昭和35年		測量調査 1/500、1/1,000地形図作成
昭和36年		多賀城跡 金堂・講堂・中門・西倉・築地
昭和37年		多賀城跡 塔・僧坊・経楼・鐘楼・東倉
昭和38年	1次	政庁地区 正殿・後殿・南門・石敷広場ほか
昭和39年	2次	政庁地区 西脇殿・西楼・西翼楼・石組溝ほか
昭和40年	3次	政庁地区 西門・後殿・北門

②多賀城町による発掘調査

年度	回数	発掘調査地区
昭和41年		多賀城跡 金堂西基壇・僧坊東部・築地ほか
昭和42年		多賀城跡 多賀神社移転地・経楼・西倉ほか
昭和43年	4次	政庁地区 東西脇殿・東翼楼
昭和44年	6次	政庁地区 正殿・東楼・築地・北東地区建物跡

③多賀城跡調査研究所による発掘調査

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積(m ²)	経費(千円)	計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積(m ²)	経費(千円)
第1次5ヶ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000	第4次5ヶ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000
		6次	政庁地区北東部	2,079				46次	外郭西門地区	750	
		7次	外郭南辺中央部(多賀城碑付近)	264				47次	外郭西辺中央部	1,000	
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000		昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000
		9次	政庁地区南西部	2,046				49次	外郭北門推定地区	450	
		10次	外郭西辺中央部	495				昭和61	50次	政庁南地区	
	11次	外郭東辺南部	660	51次	外郭北東隅東地区		500				
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000		昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000
		13次	外郭東辺東門付近	1,600				53次	外郭東門北東地区	1,000	
		14次	外郭東地区北部	2,086				昭和63	54次	外郭東門東地区	
	15次	鴻の池周辺	112	55次	外郭東辺中央部(作貫地区)		500				
	昭和47	16次	政庁地区北半部	1,320	13,000		平成元	56次	大畑地区北半部	1,550	29,000
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729				57次	外郭東辺南半部(西沢地区)	500	
		18次	外郭中央地区北部	2,937			平成2	58次	大畑地区中央部	1,470	30,000
	昭和48	19次	政庁地区北西部	2,640	59次			大畑地区中央部東側	900		
		20次	外郭南辺中央部	990	平成3			60次	大畑地区中央部	1,450	
	21次	外郭西地区中央部	1,485	61次			鴻の池地区	150			
	昭和49	22次	城外南方(高平遺跡)	3,465	17,000		平成4	62次	大畑地区南半部	1,100	35,000
23次		外郭東地区北部(字大畑)	3,300	63次		大畑地区北半部		1,700			
第2次5ヶ年計画	昭和49	24次	外郭南東隅	2,640	17,000	平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000	
		昭和50	25次	多賀城跡南大門推定地			2,310	22,000	平成6		65次
	26次		多賀城跡中門前方地区	2,310	平成7	66次	大畑地区北西部		3,000		
	27次		総社官西隣市川大久保地区	660	平成8	67次	大畑地区西部		3,000	39,000	
	昭和51	28次	五万崎地区	2,310	22,000	平成9	68次	大畑地区西部・多賀城碑	2,650		
		29次	五万崎地区	2,310		平成10	69次	城前地区南部	2,000	36,000	
	昭和52	30次	五万崎地区	1,980	22,000	平成11	70次	城前地区南部	2,000		37,700
		31次	政庁北方隣接地区	1,980			平成12	71次	城前地区南部	2,000	
	昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000	22,000	平成13	72次	南門西側築地塀跡・政庁一南門間道路跡	1,000	28,900	
		33次	外郭西門地区	1,000			平成14	73次	南門東側築地塀跡・政庁一南門間道路跡		1,800
	第3次5ヶ年計画	昭和54	34次	雀山地区南低湿地	1,300	30,000	平成15	74次	政庁一南門間道路跡	1,000	25,220
			35次	鴻の池南地区	900			平成16	76次	政庁東脇殿・後殿・北辺地区	
昭和55		36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800	30,000	平成17	77次		政庁東楼・西脇殿・南面地区	970	23,730
		37次	多賀城外南地方(砂押川東岸)地区	700		平成18	78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区	2,700	16,610	
昭和56		38次	作貫南端低湿地(緊急調査)	50	35,000	平成19	79次	政庁一南門間道路、城前・鴻の池地区	1,350		14,168
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500		平成20	80次	田屋場地区・政庁南西地区	930	12,752	
昭和57		40次	外郭南辺築地東半中央部(立石地区・緊急)	80	32,000	平成21	81次	鴻の池地区・政庁南西地区	900		12,064
		41次	外郭東辺南端部(田屋場東端地区)	1,200			平成22	82次	外郭東辺伊保石地区	580	
昭和58		42次	外郭東地域中央部(作貫地区)	500	32,000	平成23	83次	外郭南辺五万崎地区	960	11,447	
		43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800			平成24	84次	外郭南辺五万崎地区		445
昭和59	44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500	32,000	85次	政庁地区 正殿跡		415	10,300		
	平成25	86次	外郭南辺坂下地区		350	平成26	87次	外郭南辺田屋場・坂下地区		910	9,901
平成26		87次	外郭南辺田屋場・坂下地区	910	9,901						

調査面積累計	113298m ²
調査費用累計	1,122,210千円
指定地総面積	約1,070,000m ²
調査面積/総面積	約11%

表2 発掘調査実績

別史跡多賀城跡附寺跡環境整備委員会」を組織し、昭和41・42年度に多賀城廢寺跡を、昭和43・44年度には政庁跡を対象とし、整備を目的とした発掘調査を実施した。

宮城県は、周辺で活発化した開発に対処し遺跡の保護に万全を期すため、多賀城跡の実態を把握することを目的として、昭和44年多賀城跡調査研究所を設立し、以降、特別史跡の発掘調査を直営で推進することとした。調査に際しては、史跡の総合的な研究をめざして設置された多賀城跡調査研究指導委員会（平成17年度からは多賀城跡調査研究委員会）の指導を受けながら5カ年計画を策定し、これを積み重ねる方法をとっている。平成26年度が第10次5ケ年計画の初年次にあたる。これまでの調査総面積は113,298㎡で、指定地の約11%にあたる。

昭和54年以降には、多賀城跡の南側において、三陸自動車道建設、都市計画道建設、土地区画整理等を原因とする記録保存調査が多賀城市教育委員会及び宮城県教育委員会によって断続的に行われ、平安時代の都市の姿が明らかになりつつある。

① 政庁

多賀城跡のほぼ中央にあり、東西103m、南北116mの長方形の範囲に築地塀を巡らせている。創建以来大きく4時期の変遷があることが発掘調査で明らかにされており、各時期の面影は多賀城碑に記された多賀城の創建と改修、六国史にみえる伊治公昔麻呂の乱の際の火災や貞観の大地震と対応する。この時期区分は多賀城全体の変遷を考える基本となっている。

第Ⅰ期：神亀元（724）年大野東人による創建～天平宝字6（762）年藤原朝彥による改修

第Ⅱ期：藤原朝彥による改修～宝亀11（780）年伊治公昔麻呂の乱の際の火災

第Ⅲ期：火災後の再建～貞観11（869）年陸奥国大地震

第Ⅳ期：地震後の復興～11世紀中頃

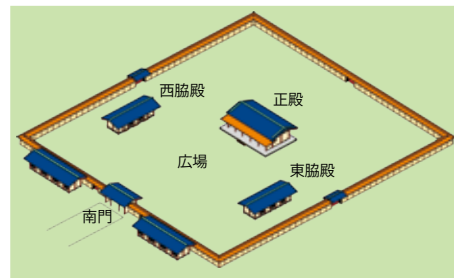
第Ⅰ期の建物は、正殿、東西脇殿、南門、南門前殿から構成される。正殿前には広場が設けられる。この建物配置は多賀城以降の東北地方の城柵政庁のモデルとなった。

第Ⅱ期には全面的な建て替えが行われた。正殿・

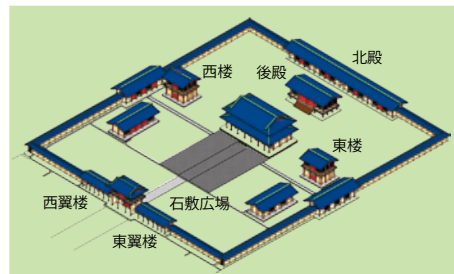
東西脇殿に加え、翼楼の付いた南門・東西楼・後殿が全て礎石式で建てられ、築地塀の各辺には西殿・東殿・北殿も設けられる。中央の広場は石敷とされ、広場の南と東西築地塀の内側には石組の排水溝が敷設される。第Ⅱ期は政庁が機能性と荘厳性を最も兼ね備えた時期であり、その建物構成は以降の政庁に基本形として継承されている。

第Ⅲ期には、築地塀に取り付いていた翼楼・北殿・東殿・西殿が取り払われるが、内部は第Ⅱ期の配置を継承して建物が再建される。

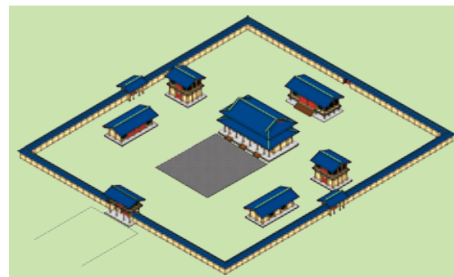
第Ⅳ期は基本的に第Ⅲ期の建物配置を継承しているが、後殿の後方に掘立柱建物が東西対称に加えられ、さらに北辺築地塀外の西側に掘立柱建物群が建てられるが、それらは終末には失われ、政庁内の北西部で小規模な掘立柱建物が変遷する。



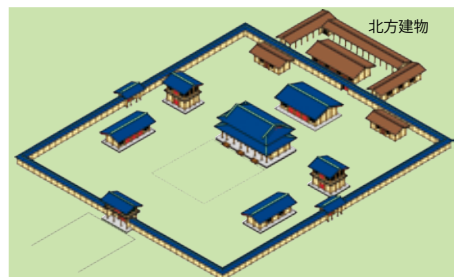
第Ⅰ期政庁イメージ



第Ⅱ期政庁イメージ



第Ⅲ期政庁イメージ



第Ⅳ期政庁イメージ

② 外郭施設と門、道路

外郭施設は一部に湿地を取り込みながら、政庁と実務官衙群のある丘陵部を不整な方形に囲んでいる。その規模は南辺約 870m、東辺約 1050m、北辺約 780m、西辺約 660m で、主に丘陵部は築地塀、湿地部は材木塀で遮蔽されていた。発掘調査によって各時期の様子も明らかになりつつある。創建当初の南辺は第Ⅱ期以降より約 120m 北側に位置し、東辺は北の加瀬沼まで伸びていた。第Ⅱ期になると、南辺が南に移動し、広く取り込んだ湿地部にも大規模な基礎地業を行って築地塀を造り瓦を葺いている。第Ⅲ期には東辺北半部が内側に移動する。また、一定の間隔で櫓が取り付けられた。

外郭の門は、南門、東門、西門が調査されている。北門は発見されていない。

南門は南辺のほぼ中央部に位置し、政庁南大路を登って直線的に政庁に向かう多賀城の正門であった。第Ⅰ期は掘立式の八脚門で、第Ⅱ期以降には南辺の拡大に伴って南に移動し、礎石式、瓦葺きの八脚門とされた。多賀城の正門として、特に荘厳さと巨大さを誇示したものと考えられる。

東門と西門は基本的に城内を北東から南西に伸びる尾根筋に置かれたが、時期によって多少移動している。

第Ⅰ期の東門は、尾根筋より 160m 南側に掘立式の八脚門があり、尾根筋には棟門むなもんがあった。八脚門はいわば威厳を示す門であり、尾根筋からよく見える所に位置する。棟門は通行上の実用的な門とみられる。第Ⅱ期になると、第Ⅰ期の棟門の位置に八脚門が移され礎石式となる。装飾性と実用性を統合して実用の場に威厳を示す門を建てたと言えよう。第Ⅲ・Ⅳ期には、東辺の移動に伴って西に移動し、逆コ字形に内側に入り込んだ築地塀に取り付く形となる。第Ⅲ期は掘立式、第Ⅳ期は礎石式である。

西門は西辺南寄りの尾根の末端につくられている。この場所から、尾根伝いに東門まで東西道路がつながり、実務官衙間の連絡が取られていたとみられる。第Ⅰ期の門は不明である。第Ⅱ期には掘立式の八脚門が建てられ、次いで同位置で礎石式に建て替えられる。第Ⅲ期には、東門と同様に内側に移動して掘立式の八脚門となり、第Ⅳ期は再び元の位置

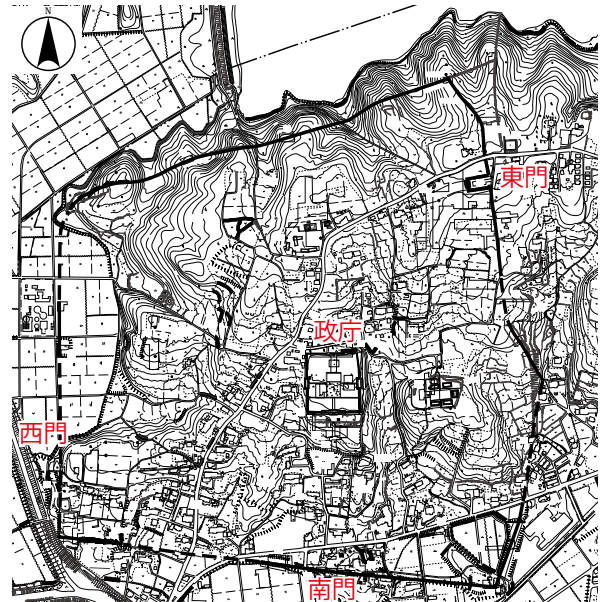
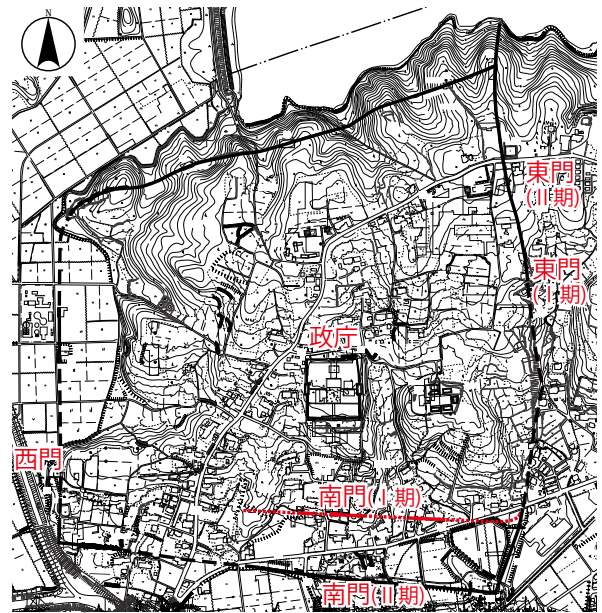


図 13 外郭施設

上：Ⅰ～Ⅱ期 下：Ⅲ～Ⅳ期



第Ⅱ期南門
復元イメージ
(市教委提供)



第Ⅳ期東門
復元イメージ

に戻って礎石式となる。

城内の主要道路として、南門から政庁に向かう政庁南大路と、東西の門と実務官衙を結ぶ東西道路がある。

政庁南大路は路幅が第Ⅰ・Ⅱ期は約13m、第Ⅲ・Ⅳ期は約23mで、南門から外の南北大路に接続していた。政庁南面では傾斜が強いため階段が造られていた。また、南門北側の低い場所には、丘陵部から東側溝に流れ込む雨水を西側の湿地に排水するための暗渠が設置されていた。

東西道路は、東門付近の路幅が第Ⅱ期が約10mで、第Ⅳ期に約20mに拡幅され路面が碎石で舗装された。東門の先は約2kmで国府津（国府の港）と見られる塩竈市香津町に至る。大畑地区には、東西道路から南の官衙域に向かう南北の道路が造られており、入口には八脚門が建てられていた。

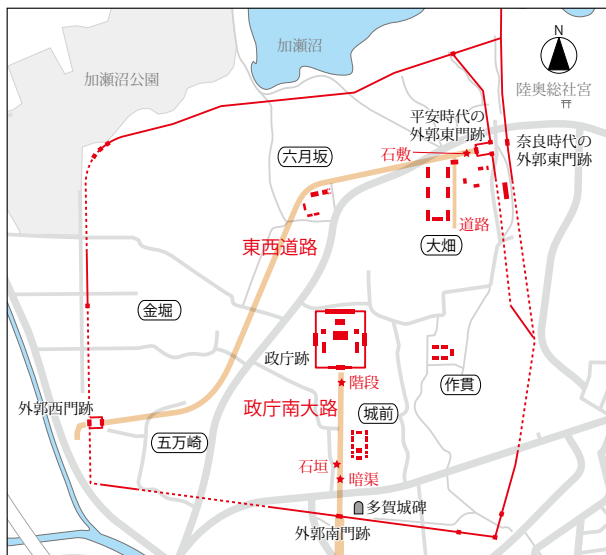


図14 城内の道路

③ 実務官衙

a. 城前地区

政庁の東南に隣接する小高い丘陵上にある。第Ⅱ期になって実務官衙が形成されるが、宝亀11(780)年に起きた伊治公告麻呂の乱で焼失し、第Ⅲ期にほぼ同位置に再建される。第Ⅱ期にまとまった官衙建物群が確認されるのは、現在のところはこの地区のみである。中央やや南寄り（りょうびさし）にある両廂付きの東西棟を中心として、その東西両側に建物を南北に配列している。両廂付き東西棟の前後にも間を置いて東西棟が建てられている。特に第Ⅱ期では、南北の軸線を政庁東辺築地塀の延長上にとり、正殿からの距離に規則性を持たせるなど、建物配置に政庁を基準とした明確な計画性が認められる。

離に規則性を持たせるなど、建物配置に政庁を基準とした明確な計画性が認められる。

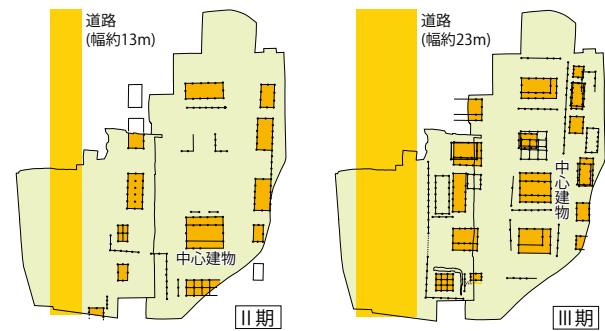


図15 城前地区の建物配置模式図

b. 東門・大畑地区

外郭東門を入った南側に広がり、城内最大規模の実務官衙域と見られる。奈良時代の第Ⅱ期には、東辺沿いに長大な両廂付きの南北棟が見られ、西側には堅穴住居もつくられていた。本格的な官衙域が展開するのは第Ⅲ期になってからである。官衙域は東西道路に面し、材木塀で囲まれていた。入口には八脚門が設けられ、そこから南へ伸びる道路によって東西に二分されている。西側には7棟の大型建物がコ字状に計画的に配置されている。東側には掘立柱建物だけでなく、多数の堅穴住居や鍛冶工房があり、事務以外のさまざまな仕事が行われていたことがわかる。第Ⅳ期には、東西道路から北に兵士らの宿舍かと思われる堅穴住居が一時的に出現した。

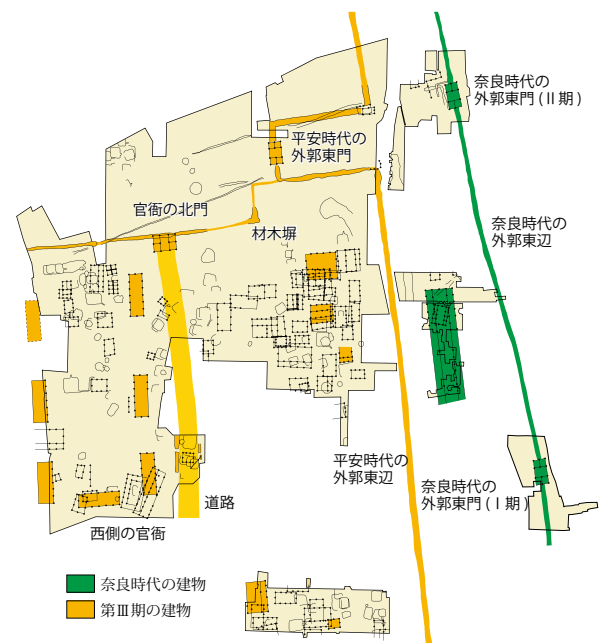


図16 東門・大畑地区の建物配置模式図

c. 作賀地区

政庁と深い沢を隔てた東の丘陵上にある。中世の館跡でもあり、近世には鹽竈神社しおがまに仕えた社人が屋敷を構えていた。

奈良時代の第Ⅱ期には、北と南に廂付きの長大な東西棟が向き合うように並ぶ。第Ⅲ期には、西にある政庁に向けてコ字形に配置された建物群が出現する。中心となる建物は南北棟で東西に廂が付く。これらの建物は同位置で二回建て替えられており、同じ機能が第Ⅳ期まで維持されたと見られる。

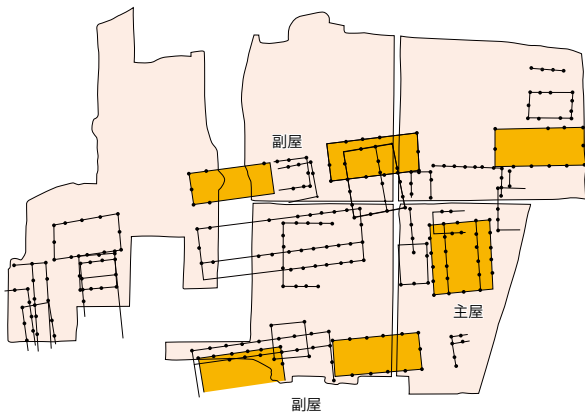


図 17 作賀地区の建物配置模式図 (第Ⅲ期)

d. 六月坂地区

六月坂地区は政庁の北側にあり、東西道路によって大畑・五万崎地区と連結していた。第Ⅲ期に道路の南側で実務官衙が整備され、大型の四面廂付き掘立柱建物を東西に配置し、小規模な掘立柱建物を付属させている。四面廂付き建物は城内では政庁正殿以外に例がなく、格式の高い重要な官衙とみられる。第Ⅳ期になると、四面廂付き建物は礎石式の総柱建そうばしら

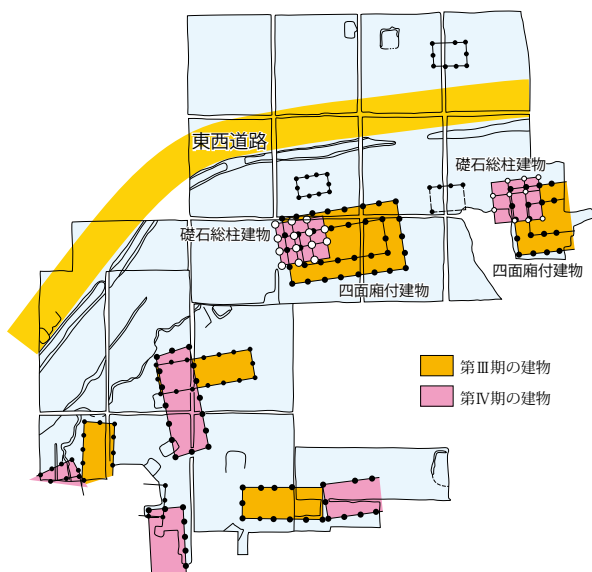


図 18 六月坂地区の建物配置模式図

物にかわる。礎石式の総柱建物も城内の実務官衙群では唯一のもので、庫あるいは楼と見られる。

e. その他の地区

西門・五万崎地区は西門の東に広がる地区である。東西道路の北側と南側で第Ⅲ・Ⅳ期の掘立柱建物跡や金属器生産関係の工房が発見されている。

金堀地区からは、第Ⅲ・Ⅳ期の掘立柱建物群のほかに、塀で区画したトイレ遺構や竪穴住居群が発見されている。

④ 多賀城廃寺跡

多賀城跡の南東約 1 km の丘陵上にある。多賀城と同時に造営され、伽藍がらんの方向は多賀城跡の南辺築地塀とほぼ一致する。中門と講堂を築地塀で方形に連結し、内部の東に三重と推定される塔、西に東向きの金堂を配置する。講堂の左右後方には、経楼・鐘楼、東西の倉を置き、北正面には軒廊で連結した僧房、さらにその北に小子房しょうしぼうを配置する。この伽藍配置は、九州大宰府の付属寺院観世音寺と同様であり、多賀城以前の陸奥国府である仙台市郡山官衙遺跡の付属寺院にも類似している。寺院の名称も、「観音寺」と墨書された土器が寺跡の西方約 2km にある東西大路脇から発見されたことから、観世音寺であった可能性が高い。第Ⅲ期の瓦がほとんどみられないことから、伊治公告麻呂の火災から免れたものと考えられ、12 世紀頃まで存続した可能性がある。



多賀城廃寺復元模型

⑤ 多賀城碑

南門を入った東側にあり、覆屋の中に立っている。高さ 248cm、幅 103cm、厚さ 72cm の円首碑で、碑面を西に向けて建てられている。石材は周辺から産出するアルコース砂岩で、碑面には 141 字の文字が彫り込まれている。藤原朝篤が多賀城を改修した記念碑で、神亀元 (724) 年の多賀城創建と天平宝字 6 (762) 年の改修を伝える貴重な歴史史料である。



多賀城碑

昭和48・49年に多賀城跡調査研究所により、碑の形状、筆跡、内容等について考古学・文献史学等の立場から総合的な検討が行われ、明治以来の偽作説には十分な根拠がないことが明らかにされた。また、平成9

年度には碑の根元の発掘調査も行われ、多賀城と古代東北の解明にとって重要な史料として平成10年に重要文化財に指定された。

⑥ 古代都市と国司館

平安時代になると、多賀城跡の南面には方格状の地割りが施され、多賀城を支えたまち並みが形成された。街並みは、外郭南門から直線的に伸びる南北大路と、南門から540m（5町）南で交差する東西大路を基準につくられている。南北大路は当初は幅が約18mで敷設されたが、第Ⅲ期には約23mに拡幅されている。東西大路は多賀城の南辺築地塀と並行してつくられており、幅は一貫して約12mで



下級役人の家 山王遺跡八幡地区。



運河 市川橋遺跡。多賀城跡と砂押川を結ぶ大溝。



国司館（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）館前遺跡。



国司館 山王遺跡多賀前南区。遣り水の付いた庭園がある。高級な土器が多量に見つかった。



くにかみ
国守館
(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
山王遺跡千刈田地区。



南北大路
(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
市川橋遺跡。道幅23m。



細長い建物
(提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター)
市川橋遺跡。南北大路と平行している。

図19 古代都市と国司館

ある。都から通じる^{とうさんどう}東山道の延長と考えられる。2つの大路に並行あるいは直行して東西・南北の小路が徐々につくられ、方格状に区画されたまち並みが拡大していった。その広がりや、最終的に東西約1,500m、南北は約800mに及んでいる。

東西大路に面した区画を中心として、国司の館とみられる遺構が発見されている。山王遺跡^{せんがりた}千刈田地区では、10世紀初め頃の四面廂付きの建物を主屋とする建物群がみつまっている。輸入陶器や多量の^{せゆうとうき}施釉陶器のほか、右大臣に馬を贈った返書^{かえがし}を収めた^{だいせんじくもつかん}題箋軸木簡が出土したことから、国守の館と考えられ、特別史跡の追加指定を受けた。ほかに多賀前地区でも東西大路に面した南と北の区画で国司の館がみつまっている。いずれも9世紀代のもので、南側の邸宅には「遣り水^{やりみず}」を設けた庭園がある。

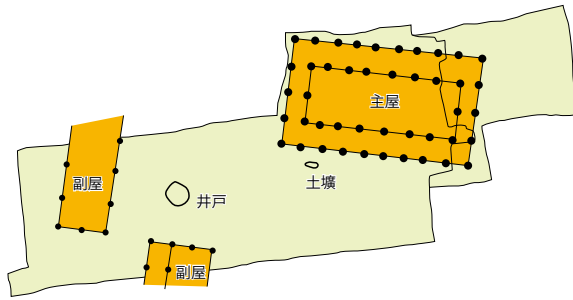


図20 山王遺跡千刈田地区の建物配置模式図 (原図市教委提供)

^{たてまえ}館前遺跡は多賀城跡南東の独立丘陵に位置し、現在のところ道路との関係は不明である。中央の四面廂付き建物を囲むように5棟の掘立柱建物が配置されており、9世紀前半頃の国司クラスの館と推定されている。千刈田地区と同様に特別史跡の追加指定を受けている。

東西・南北大路交差点の北側には長大な建物が整

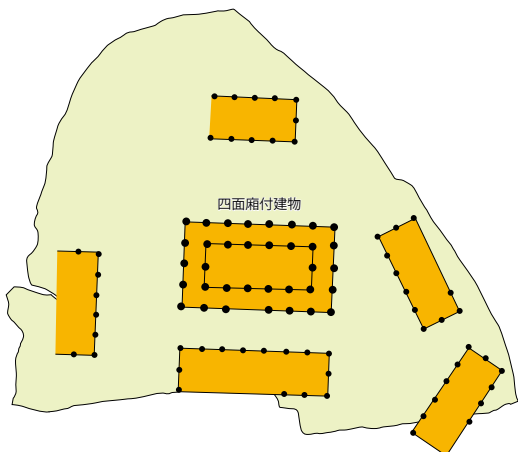


図21 館前遺跡建物配置模式図 (原図市教委提供)



館前遺跡
ジオラマ
(市教委提供)

然と配置されており、公的な空間が形成されていた可能性がある。

大路から入った小路沿いでは、小規模な建物や竪穴住居、井戸、畑などが発見されており、陸奥国内の郡衙の出張所や国府で働く下級役人の住まいのほか、さまざまな工房があったと考えられる。まち並みの南・北側には水田が広がっていた。

まち並みを流れる河川の水辺などからは、^{ひとがた}人形や^{うまがた}馬形などの木製^{かたしろ}形代や人面を書いた土器等が出土し、穢れや病気・災厄をはらうために様々な^{さいし}祭祀が行われていたことが知られる。

⑦ 官営製鉄所 柏木遺跡

多賀城跡の南東約4km、七ヶ浜町との境界近くにある。製鉄炉、木炭窯、鍛冶工房、粘土採掘坑などが発見され、ここで一連の鉄生産が行われていたことが明らかにされた。多賀城に近く、年代が8世紀前半であることから多賀城創建に関わる製鉄所跡と理解され、特別史跡の追加指定を受けている。

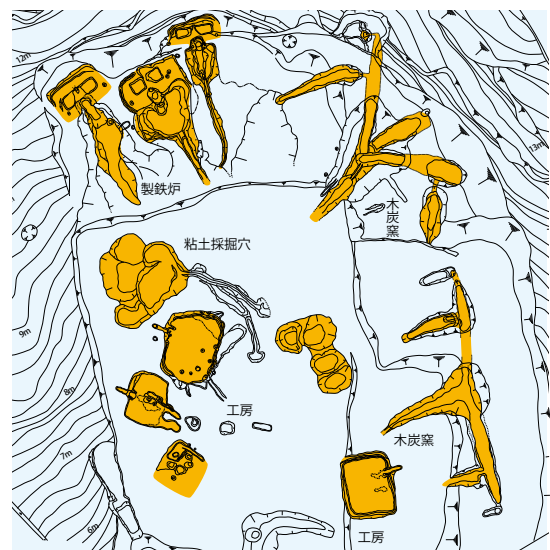


図22 柏木遺跡の遺構配置図 (原図市教委提供)

⑧ 花粉分析による植生復元

花粉分析は、これまでに第11・34・61・81次調査において行われている。第11次は^{すずめやま}雀山地区東側・あやめ園の外郭東辺付近(安田1973)、第34

次は雀山地区西側の外郭南辺付近(安田 1980)、第 61 次と第 81 次は鴻の池地区(守田 1992、吉田・鈴木 2013)の土壌サンプルによる。いずれも多賀城跡南部の湿地からのデータである。

これらの結果をあわせると、多賀城跡周辺の古代の植生変遷の概要は以下のような状況であったと考えられる。

多賀城が築造される以前は、周辺の丘陵部にはコナラ亜属・ブナ属・クマシデ属・ケヤキ(ニレ属)などの温帯性の落葉広葉樹の自然林あるいは二次林が繁茂し、低地にはハンノキと思われるハンノキ属湿地林が形成されていた。多賀城の築造後は、丘陵地ではヨモギ属やオオバコ属の生える草地が増加し、またアカマツと思われるマツ属の林が急速に拡

大した。一方、低地ではハンノキ林が急速になくなるのと対照的にイネ科花粉が増加する。これは低湿地の水田開発がかなりの規模で行われたことを示唆している。樹木花粉量/全花粉量の比からは、丘陵地・低湿地での樹木の伐採・開発によって城内外の森林・樹木の量がわずかとなったことが推定される。

9 世紀後半以降になると、ブナ属・コナラ亜属が再び増え始め、多賀城周辺の森林化(自然林化)が再び始まったように思われる。

10 世紀前葉の十和田 a 火山灰(灰白色火山灰)降下後には低地でイネ科植物が増加し、丘陵ではブナ属がほとんど消滅するとともにマツ属が増加し、またスギ属も目立ってくる。これは多賀城においてのみという事ではなく、仙台平野一帯の農地化の進

行によるものと思われる。

なお、第 81 次サンプルでは多賀城築造前の土層からソバ属(栽培種)が、築造後の土層からはクワ属花粉の増加が見られ、築造以前の作物栽培と築造後の養蚕の可能性が考えられ、注目される。

	鴻の池 (81次) (吉田・鈴木2013)	鴻の池 (61次) (守田1992 年報1991)	外郭南辺、雀山西 (34次) (安田1980 年報1979)	外郭東辺、あやめ園 (11次) (安田1973)
I 期 以前	TGJ-1 木本花粉81%。コナラ亜属、クマシデ属、ハンノキ属、草本花粉・シダ類胞子は低率だが、カヤツリグサ科・イネ科が目立つ。	15層 木本花粉82%。ハンノキ属が卓越。コナラ亜属・クマシデ属・ブナ型。草本花粉・シダ類胞子は低率だがイネ科・カヤツリグサ科。	自然 立株 自然立株 7 本中ハンノキ属 6、クリ 1。(杭は 7 本中クリ 3、コナラ属 2、モミ 1、樹枝はコナラ属 1、ハンノキ属 1)。	III 木本・草本花粉は均衡。コナラ亜属・ハンノキ属、カヤツリグサ科・ウラボシ科・イネ科。 II 木本花粉が圧倒的多数で、ブナ属・コナラ亜属・ハンノキ属、草本花粉は微少でカヤツリグサ科。
I 期 (724~)				
II 期 (762~)	TCJ-2 (700~780) 木本花粉減少傾向。ハンノキ属が卓越。クマシデ属・コナラ亜属、草本花粉24~78%でヨモギ属が急増卓越。ソバ属 1 粒。		NO.10 木本花粉52.8%。草本花粉25.7%。シダ類胞子21.5%。ハンノキ属卓越次いでブナ属、カヤツリグサ科・ゼンマイ属、クンショウモあり。	
III 期 (780~)	TGJ-3 (780~830) 木本花粉18%。マツ属(アカマツ 2 次林)が急増卓越。ハンノキ属は急減。コナラ亜属も低率。草本花粉79%でヨモギ属卓越。イネ科も多い。	12層 木本花粉19%。ハンノキ属は激減。ブナ型微増で高木筆頭。他にコナラ亜属、マツ属も増加。草本花粉81%。ヨモギ属急増卓越。アカザ科ヒユ科も急増。他にイネ科。	NO.9 木本花粉、草本花粉、シダ類胞子の比率及び検出花粉は NO.10 と同じ。クンショウモは減少する。	I-4 木本花粉が45%前後に減少。ゼンマイ属が草本花粉では急増卓越。カヤツリグサ科・ウラボシ科は徐々に増える。木本花粉はブナ属・コナラ亜属・ハンノキ属が均衡。
IV 期 (869~)	TGJ-4 (830~915) 木本花粉22~24%。マツ属が激減し、ブナ属ブナ型・コナラ亜属・ケヤキ属が低率で均衡。草本花粉73%と高率で、ヨモギ属・イネ科が均衡。	11層 木本花粉17%。傾向は12層と同じ。 10層 木本花粉8%。マツ属・スギ属微増でマツ属卓越。コナラ亜属・ブナ型微減し。増えたスギ属と均衡。草本花粉88%でイネ科急増突出。他にヨモギ属・アカザ科ヒユ科。	NO.8 木本花粉44.9%。草本花粉40.8%。シダ類胞子14.3%と草本が激増。ハンノキ属激減。ゼンマイ属半減。ブナ属・コナラ亜属、イネ科・カヤツリグサ科増加。クンショウモも増加。 NO.7 木本花粉49.7%。草本花粉49.7%で、シダ類胞子0.6%に激減。コナラ亜属・ブナ属、イネ科・カヤツリグサ科。	I-3 木本花粉30%。ハンノキ属が急減しブナ属・コナラ亜属中心でマツ属が微増。草本はイネ科が突然急増。セリ科・タデ属も増える。ゼンマイ属は次第に減少。カヤツリグサ科も多い。
IV 期 (灰白色火山灰後~)		7層 木本花粉16%で樹種は10層と類似。草本花粉86%。イネ科・ヨモギ属・アカザ科ヒユ科が均衡。ソバ属が7層・8層で出現。 6層 木本花粉4%。コナラ亜属・スギ属・マツ属。草本花粉96%でアカザ科ヒユ科・アブラナ科卓越。他にイネ科・ヨモギ属。	NO.5 木本花粉36.2%。草本花粉59.6%。シダ類胞子4.2%と草本が6割。イネ科激増卓越(35%)。カヤツリグサ科・ヨモギ属も急増。木はコナラ亜属・ブナ属。ミスゴケ属が急出現。 NO.4 木本花粉24.7%。草本花粉73.8%。シダ類胞子1.5%。イネ科さらに増加(56.3%)。ヨモギ属も増。カヤツリグサ科は減少。木本はNO.5と同じ。ミスゴケ属減少。	I-2 木本花粉35%。木本はブナ属・コナラ亜属が卓越し、マツ属は減少。セリ科が急増卓越。ヨモギ属も増えイネ科・カヤツリグサ科と同程度になる。 I-1 木本花粉35%。木本はマツ属・スギ属が卓越し、ブナ属・コナラ亜属は減少。草本はイネ科が卓越。他にセリ科・ヨモギ属。

表 3 花粉分析の成果